

世界の人口が八〇億人を突破したが、そのうち4億人弱は世界の九〇カ国以上に生活する先住民族とされる。一九九二年に国際連合により「外部から到来した異質の文化をもつ人々が地域住民を支配して植民地的状況にしてしまった時代に、それらの地域に生活していた人々の現存する子孫」と定義されている人々であり、日本ではアイヌ民族が該当する。

筆者は世界各地の三〇以上の先住民族を訪問した経験があるが、それらの人々はアマゾンの熱帯雨林の奥地や南洋の小島の海上に生活しているなど、現在の大半の社会とは異質の空間で異質の生活をしており、一般には近代社会への移行に出遅れたと理解されてきたが、最近では環境問題の視点から注目されつつある。

昨年一一月にエジプトで開催された気候変動についての国際会議COP27では結論の合意が難航し、七年前にパリで開催されたCOP21で決定された目標を達成することは容易ではないことを明確にした。そこで資源転換や技術革新に依存するだけでなく、社会構造や生活様式まで転換することが必要になる。

そのため現代文明とは異質の理念で生活してきた先住民族の活動が参考になる。北米大陸中央の乾燥地帯に生活する先住民族ナヴァホの主要作物はトウモロコシであるが、面責あたりの栽培本数は日本の一分の一以下でしかない。乾燥地帯で土中の水分が十分ではないため、それ以上の本数は栽培できないという理由である。

この地域の西側にはコロラド渓谷があり、運河を掘削すれば大量の導水が可能であるが、それは祖先から継承してきた自然を破壊するという理由で拒否している。そのコロラド渓谷の東側の乾燥地帯には24時間都市ラスベガスがあり、その水道も電力もコロラド渓谷の恩恵である。伝統文化と現代文化の見事な対照である。

第二次世界大戦後、ゴビ砂漠の北側はモンゴル国、南側は中国の内モンゴル自治区に分割された。それから半世紀以上が経過した現状の衛星写真では、北側は草原のままであるが、南側は砂漠に変貌している。北側は草原全体が共有であるため過剰に利用しないが、南側は私有にしたため、限界以上の放牧をしてきた結果である。

オーストラリア大陸では広大な森林火災が頻発している。先住民族アボリジニはブッシュファイアといわれる人為の放火で延焼を阻止していたが、政府が自然破壊であると禁止したため、森林火災が阻止できなくなったのである。放火の現場を見学したが、延焼しそうな場所に火入れをして、一種の防火帯を実現するのである。

未来から現在を予測するバックキャストという理念は一九八〇年代に提言されたが、前出のナヴァホには「現在の環境は未来の子孫から預託されたもの」、やはり北米大陸の先住民族イロコイには「七世代先の子孫を配慮して物事を決定する」という言葉が伝承されている。はるか以前からバックキャストを実践してきたことになる。

一八世紀に進歩史観が登場し、人間の社会は時間とともに良好な方向に移行していくという理念が浸透してきた。しかし世界各地での紛争、強欲資本主義の横行、そして環境問題の悪化など、進歩史観を裏切る事態が頻発している。アボリジニの画家B・ロバーツの「未来に進行できないときは伝統文化を見直すこと」という言葉が気候変動への対応の指針となる。